

# 「四国遍路と世界の巡礼」総論

山 川 廣 司

平成13年度に「四国遍路と世界の巡礼」というテーマを掲げて、愛媛大学法文学部人文学科の史学・国文学の教官が中心となって公開講座を開いた。まず最初に、その経緯について述べたい。人文学科では、一昨年来「愛媛大学創生プラン」に基づく議論がなされてきたが、その中で我々史学（日本史・東洋史・西洋史）と国文学の教官が「地域」について話し合った。当然専門分野の関係から、それを時空間的に捉えるとどうなるかと言うことが話題になり、そこで四国の伝統文化である「遍路」がテーマとなり、それぞれの専門分野での知識を生かしながら、共通に扱えるテーマとしておもしろいのではないかと言うことでトントン拍子に話が進んだ。ただ、「四国遍路」では東洋史や西洋史の教官が関わりにくいこともあり、世界各地に見える「巡礼」活動にも対象を拡げ、共同研究、比較研究を進め、多元的に研究を推進し、グローバルな視点で巡礼活動を探究し、その成果を世界に発信することを目指してプロジェクトを立ち上げた次第である。

さて、「巡礼」とはどのような行為なのであろうか。山折哲雄氏の定義によれば、「聖地や霊場を順に参拝して信仰を深め、心身のよみがえりと新生の体験また利益を得るための宗教行為であり、その参拝場所は宗教の発祥地、本山の所在地、聖者や聖人の居住地や墓、奇跡や霊験を伝える場所などであり、それらを巡拝することを通して祈願の成就と贖罪や滅罪の効果を期待した」としている。

日本では、西国、板東、秩父などの三十三観音巡礼や四国八十八カ所巡礼のように、廻る寺院ばかりでなく、その順番まで番号順に定まっているものや、特に巡拝地を定めず、各地に散在する聖地を巡り歩く巡礼霊場としてのまとまりをほとんど持たないものまで様々な巡礼がある。

巡礼は、真野俊和氏によれば、巡拝する聖地の性格から3種類ほどに大別される。①本尊巡礼で、特定の性格を持つ神仏を巡拝する巡礼で、三十三観音巡礼などがこれに当たる。②祖師巡礼で、特定の宗派の開祖や高僧にゆかりの寺々を巡る巡礼で、例えば四国八十八カ所霊場は真言宗の開祖空海（弘法大師）ゆかりの寺88ヶ寺を選んで巡る巡礼や親鸞上人二十四輩、法然上人二十五霊場などがある。ただし四国霊場巡拝のみは、これを巡礼と言わず、古くからヘンロ（遍路、辺路）と呼ばれていた。③名跡巡礼で、これは前述の2つのタイプとは違い、単に宗教上の名跡を歩くもので、六十六部（66カ所の霊地を巡り、書写した法華経一部ずつを献納して修行する行脚僧、諸国を巡り乞食する巡礼）もこれに当たる。

日本における巡礼の始まりは平安時代にまで遡ることができるが、室町時代頃から次第に盛んになり、近世にはいと爆発的に流行するようになった。しかしこの間に、一方で村で食い詰めても巡礼に出れば托鉢で何とか暮らしていけるという乞食巡礼化の方向や、民間信仰との融合なども進行してきた。

巡礼霊場の巡拝地を一般に「札所」という。これはそこに参拝した印に小さな札（納札）を納めるところから来ている。納札は古くは木製で、釘で打ち付けたため、札所に詣でることを<札を打つ>

ともいう。札所に参拝する大きな目的の1つに経巻（特に定まった経典はなく、観音経や般若心経などの比較的ポピュラーなものが多い）を納めることがあり、納経の印に、〈納経帳〉に寺の宝印を押してもらった。

一方、日本以外に目を向ければ、巡礼活動は、ユダヤ教、キリスト教は言うに及ばず、イスラム、仏教、ヒンズー教など世界各地の宗教にみられる共通の現象である。この問題について従来は、宗教学を初め教会史・社会経済史等の分野で研究が進められてきており、また伝統的歴史学においては、中世以来、キリスト教とイスラムの衝突の歴史として捉えられて来たが、関哲行氏によれば、1950～60年代のアナール学派のブローデルの研究以来、二項対立的な歴史把握は修正され、深層の歴史の1つとして日常生活の歴史理解を基本に据え、ユダヤ教、キリスト教、イスラムに共通する日常的な宗教現象（巡礼や参詣）を通じて、内面性の問題も含み込んだ地中海世界の比較史とその相対的把握を目指す「全体史」への道が開かれ、それらが時として激しく対立しながらも多様な形で共存し、政治・経済・社会的関係や文化的交流を積み重ねてきたことが指摘される。

また、ターナーの巡礼論に依れば、カトリックの巡礼の主体は民衆であり、民衆を中心とする巡礼者は、脱俗儀礼によって世俗社会から一時的に切り離され、半俗半聖の身分となり、巡礼者相互の兄弟愛と団結を基に、平等と同質性を特色とする巡礼講のようなコミュニティを組織し、来世での救済と奇跡による病気治癒などを願い、聖遺物に触れながら人類史の原点に回帰しようとした贖罪の旅が巡礼であり、それは聖地において頂点に達した。

カトリック世界の巡礼のクロノロジーを概観すれば、中世的民衆信仰と巡礼は、4～5世紀に始まり、11～13世紀の武装巡礼であった十字軍時代に頂点に達した。しかし、16世紀には、巡礼に批判的なプロテスタント勢力の拡大などによって大きな転換点を迎え、伝統的聖地への巡礼者は激減した。こうした中で、大地母神信仰に淵源し、12～13世紀以降盛んになってきたマリア信仰がキリスト教徒民衆の主要な信仰形態となった。こうして、「生命の樹」や豊饒、自然の治癒力を象徴するマリアゆかりの聖地への巡礼が16世紀以降におけるカトリック世界の巡礼の最大の特色となる。18世紀の啓蒙思想の時代に打撃を受けた巡礼は、19世紀初頭のロマン主義を背景に復活の兆しを見せ、19世紀後半には、聖地ルルドに象徴される大きなうねりとなる。貧しい少女ベルナデットへの聖母顕現、病気治癒に効果のある奇跡の泉出現を契機としてマリア信仰の拡大が、普仏戦争敗北後のフランス・ナショナリズムの高揚、鉄道網の整備、写真技術の開発などと相まって、ルルドを世界的巡礼地の1つに押し上げた。20世紀にはいると、近代合理主義や工業化社会への批判、エコロジーへの関心の高まり、余暇の増大とマス・ツーリズムの進展、列車・自動車・飛行機といった大量輸送手段の普及が巡礼者をますます増大させ、1960年代後半以降その傾向は一層顕著になっている。

再び真野氏によれば、日本においては、今まで巡礼という宗教現象を正面から論じようとする動向はあまり古くはなく、かつ多くの場合、巡礼作法の解説とか歴史的説明に留まっていた。その最大の理由は、巡礼がアマチュアの宗教だったという点に求められる。しかし、巡礼は在家の民衆の宗教・心意・表出の回路としてそれなりの意義は持っていた。まず第1に巡礼は、死者の供養・鎮魂という性格をもっていた。第2に、個人を巡礼に駆り立てる局面としては、病気やけがなど肉体的な傷害がある。札所では、今でもしばしば松葉杖やギブスなどが奉納されているが、それはかつて「お大師さんのおかげ」をいただいて身体を取り戻すことができた人々の感謝のあかしである。病気は古来人々を宗教へと誘う極めて強いモメントであったから、こうした治病の霊験は巡礼に特有な現象では必ずしもないが、巡礼における重みを無視するわけにはいかない。

また習俗のレベルでみれば、ここでも巡礼は様々な意味づけがなされてきた。第3に、若者たちの成人儀礼の一環として西国巡礼や四国遍路を課す地方がある。最近まで遍路に近い地域では、これに

出ないと一人前でないといい、年頃の若者や娘たちが集団で巡礼に出かけた。第4に、巡礼装束としては白い行衣に蓉袴（おいずる、巡礼が衣服の上に着る一種の袖無し羽織）を着、笠、杖を持つという姿が一般的である。杖は上端に五輪塔をかたどったものが多く、途中で行き倒れた時には仮の墓標とされることもあった。白衣は死装束と考えるのは地域を越えて認められる心意である。つまり巡礼とは、巡礼者が霊場を巡る間は仮の死の状態にあり、そこから新たに生まれ変わろうとする習俗なのである。第5に、杖や笠に「同行二人（どうぎょうににん）」と記すのは、常に弘法大師と二人連れという意味で、この考えは四国遍路に始まったとされている。そこには時間を超えた大師による巡礼の再体験という意味合いがある。反対に道筋の住民にとって、遍路はお大師さんその人にほかならないと考えられ、そこから様々な接待の習俗が生まれたとされている。このように多様な局面が指摘されている。

最後にこの研究の特色と意義について述べたい。

第1に、昨今、例えば、行政を中心に四国4県の地域興し運動とかあるいは民間の人たちの間での世界遺産登録の運動など、四国遍路は非常に脚光を浴びているが、そこでは「癒し」ということが前面に出ているように思われる。しかし「癒し」も巡礼の1局面なのであり、前述の研究成果なども踏まえながら、さらに総体的（トータルな）研究が求められていかなければならない。そしてこのような研究はそうした社会的な動向に学問分野から応える意義もある。

第2に、近畿地方を中心とした西国巡礼に比べて、四国遍路については研究は立ち遅れているといわれている。解明すべき点は多々ある。例えば、前田卓『巡礼の社会学』によれば、西国巡礼の最盛期は江戸時代の元禄期（17世紀末～18世紀）が全盛で、早くから大衆化していたことが窺えるが、四国遍路は文化文政（18世紀半～19世紀半）にピークを迎えており、西国巡礼の後追い現象のように見える。この1世紀のずれをどのように考えるか、などなど。幸い、愛媛大学の教官の研究分野はいろいろであるが、地域の大学としてこの問題に取り組むことは可能である。当面、四国遍路が日本の巡礼の中でどのような独自の側面を持つのかを明らかにすることを目指す。

第3に、日本における巡礼研究では、海外の巡礼活動と比較論的に考察してみようとする研究は必ずしも多くはない。ここでも愛媛大学の史学・日本文学教官スタッフ数からすれば、網羅的とはいかないが、グローバルな視点、比較史の観点（国際的比較の視座）からの研究が可能であり、広がりのある研究が期待できる。既に史学・日本文学のスタッフはそれぞれのテーマ設定を行い、研究活動を開始しつつある。

第4に、この遍路・巡礼研究を推進することで、蒐集した史料をオープンにすることができるという点である。巡礼関係の資料は在来は権力の側に偏っていた。巡礼に参加した人々（民衆）の記録がなかなか表に出てこない。遍路主体の側からみた史料として「遍路日記」と「遍路札」があるが、これらは個人的史料であり、蒐集は必ずしも容易ではないが、それらを精力的に蒐集・整理したい。そのためにもまず広範なアンケートをとり、史料の所在を明らかにし、それを例えば大学のホームページに「四国遍路史料」のデータベースを作り公開することで、全国の研究者の用に供すると同時に共同研究をする場を作りたい。

第5に、このようなネットワーク作りを行い、学内外の共同研究者との研究を深化させ、愛媛大学で研究会、シンポジウムなどを開催して研究成果を学内外に発信する。そして3年後を目処に、学位論文作成のため本学に留学した現フランス国立東洋言語文化研究所助教授のナタリー・クワメ（NATHALIE KOUWAMÉ）氏を中心に海外から研究者を招聘して、国際シンポジウムを開催し、その研究成果を世界に発信したいと計画している。

本研究は、四国遍路と世界の巡礼研究を共同で進め、その共通面と独自面を解明し、その比較を通して、各巡礼の特色、就中四国遍路の特質を鮮明にしていくことを目指している。今日までの内外の巡礼研究に依拠しつつ、比較史の視点を導入することで、遍路・巡礼研究に新局面を開くことが期待される。

#### <参考文献>

関哲行「序」(歴史学研究会編『地中海世界史4 巡礼と民衆信仰』青木書店 1999年所収)。

同 「中世のサンティアゴ巡礼と民衆信仰」(同掲書所収)。

渡邊昌美「ヨーロッパの巡礼」(懷徳堂友の会編『道と巡礼』和泉書院 1993年所収)。

山折哲雄「巡礼」の項(平凡社版『世界大百科事典』CD-ROM版)。

同 「巡礼の構造」(真野俊和編『巡礼の構造と地方巡礼』雄山閣 1996年所収)。

真野俊和「巡礼の構造および地方巡礼の研究成果と課題」(真野俊和編『巡礼の構造と地方巡礼』雄山閣 1996年所収)。

V.ターナー、富倉光雄訳『儀礼の過程』思索社 1976年。

星野英紀「比較巡礼論の試み——巡礼コミュニティ論と四国遍路」(真野俊和編『巡礼の構造と地方巡礼』雄山閣 1996年所収)。

星野英紀『巡礼——聖と俗の現象学』講談社現代新書 1981年。

前田卓『巡礼の社会学——西国巡礼・四国遍路——』ミネルヴァ書房、1971年。